# 大学の研究室をたたむとき

国立大学の教授にも定年はある。大学を去る「一国一城の主」の立振舞は、大学や学部によって様々で、定式はない。

３月、自分より１年前に生まれた先輩教授を送って、さて、残り１年をどうしようかと思った。大学院改革のさなか、自ら望んで研究科の専攻長になったので、実現しても自分には関係ないぞと改革にナタを振るい、けっこう忙しい。

近年、大学の改革が進んだ。教授を頂点とし、助教授、助手、大学院生、卒業論文生と並ぶ「講座制」は崩壊しつつある。しかし、1960年代のころは講座制の壁は高く丈夫で、それが若い研究者の自由な交流を妨げると発言すれば、「先見の明あり」どころか、「危険分子」とみなされた。時代を主導する価値観の変化は、驚くばかりである。

「講座制」が崩れると、教授は裸になる。会議、授業、学生実験、研究指導、文献調査、学術講演、なんでもこなさないといけない。これをどう評価するか。

私の場合、学生実験や研究指導で学生とじかに話をするとき、学生の時代変化に愚痴を言わないようにし、時代を超えた普遍の若人像を見るようにしたので、それが自分を柔軟にし、教育を楽しいものにした。ただ困ることもある。それが「研究室をたたむとき」の話題になる。

その１つは、研究テーマの後継者がなくて、テーマの断絶が起こること。私の助手の時代には、助手が教授の研究を引き継いでいたと思うが、今では助手も少なくなり、先生のお手伝いより、自分の発想をバリバリやらないと自分の将来が危うい。

テーマの断絶は、「新陳代謝さ」といって笑うこともできるが、自然界から苦心して分離した微生物株はどうするか。酵母がリパーゼ（酵素）の大量生産に使えることを示した、その酵母、魚油からタンパク質を効率よく作る酵母、珍しいリパーゼを作るカビの仲間などを餓死させてよいか。考えたあげく、微生物名を明らかにした株は、国内の保存機関（理化学研究所）に寄託することにした。これでかれらは、私の死後もずっと生き続けるだろう。オランダの希望で先に海を渡った酵母は、すでにアメリカやロシアに分家している。研究報告は古くなるけど、かれらは古くならない。そう、かれらは「永遠」なのだ。

正月が過ぎると、いよいよ最終段階。教授室の片づけを始める。前任教授から引き継いだ本を含めて、公費で買った、ナンバー入り図書がたくさんある。これを図書館から届いたリストと照合する。ところが不明図書が続出する。自分が購入した本については、自己作成のデータベースがあったので、「捜索」は容易だったが、他はお手上げ。過去に、大学の本を「私物化」してしまった先生がいらっしゃったせいか、図書館からの通知はうたがい深く、ついに最後に始末書を書かされた。

各種会議の資料もぼうだいな量が部屋に積まれていた。生物圏科学研究科の改組に関わる、初期の資料は、事務の方で役立ったようだが、ほかは今やただのゴミ。これを「資源」として生かすため、ヒモでくくった束が、廊下にうずたかくなった。要らなくなった古い本、学会誌、パンフレット、カタログ、ダイレクトメールを合わせると、その量は軽トラック２台分とも、３台分とも思われた。

教授室に残るは、「心の整理」ができないやっかいなものばかり。研究報告の別刷りは、20部程度を残して、できるだけ主たる研究者に送付した。その送料もかなりになったが、余った研究費で払った。博士論文、修士論文、卒業論文、文献カード、文献のコピー、研究メモ、などなどは、どんどん箱に詰めて自宅に運んだ。定年後ゆっくり整理しようとかいう「決断」は、いまだ宙に浮いている。

最後に、個人的に使った理化学機器、測定器械、ガラス器具、試薬をどうするか。「講座制」が強固だったときには、これらは講座の所有物なので、そのままそっくり残すのが習い。しかし、「講座制」が緩むにしたがって、教官が他大学に転任するとき、自分の使っていたものを全部、遠慮深いひとは一部を新任地に運ぶようになった。さらに、広島県産業科学技術研究所の話を聞けば、プロジェクトリーダーは研究室だけ与えられ、もってきた予算で必要品のすべてを買い、研究が終われば試験管、鉛筆の１本まで片づけるという。

ならばと、国立大学では前例がなさそうな試みをした。器械について、１台ずつ、学部の全教官にメールで「引き取り」の希望を募った。機能や性能が分かりにくいものには写真も貼付した。１件につき応募が１人のときは簡単。だが、希望が３，４人になったときは、調整に苦労した。なにせ国有財産なので、競売するわけにいかない。

このようにすべての器械は、「乞われて」学部内に散っていった。間違いなく、末永く、有効利用されるだろう。放置すると、用途が分からず廃棄されたものもあったかもしれない。ガラス器具や試薬も、同様になるべくふさわしいひとに引き取ってもらった。

教授室と研究室からすべてものが消えたわけではない。しかし、「太田研究室」の中核になるものがなくなった。照明を消し、名札をはずして、自らの手で「研究室をたたんだ」ことを強く覚った。